

## 【フォーラム】

## 明治初期における日本語の一考察

森有礼の日本語廃止論・英語採用論を中心に

福元 美和子\*

(長崎短期大学)

## 概要

明治期は近代日本語の歴史においてもっとも変化と躍動が起きた時期である。鎌倉室町期以降、さまざまなお国ことばが混在した話し言葉と書き言葉が大きく乖離した状態で受け継がれてきた日本の言葉を、全国で統一した話し言葉、さらに言文一致が求められるようになっていった。その先駆けとして森有礼は「日本語廃止論・英語採用論」を唱えたとされている。本稿では、後世に渡って批判的とされてきたその原点ともいえるアメリカの言語学者ホイットニーとの書簡のやりとりの一部分を中心に、森有礼は本当に「日本語廃止論・英語採用論」を提唱したのか考察を試みる。

Copyright © 2016 by Association for Language and Cultural Education

キーワード 日本語, 英語採用論, 森有礼, 日本語廃止論, 国語政策

## 1. 森有礼

森有礼(以下、森)は、1847年、「薩摩藩鹿児島城下に生まれた。藩留学生として渡英した後、米国に行きキリスト教系の新興宗教団体『新生社』に入った。その後、明治維新の報を聞いて帰国、新政府に出仕し、法制、外交の国務に就いた。米国代理公使、清国公使、英国公使を歴任したのち、文部省に入り、御用掛、文部大臣として国家の教育の責任者となった」。しかし1889年、「伊勢神宮で森が『不敬』な行為をしたという噂に憤った刺客の凶刃に倒れた」(長谷川, 2007, p. 4)。この時42歳。

人生の約4分の1を海外で過ごした森であるが、西洋の学問や文化に最初に触れたのは青年時代であった。藩の洋学研究所である開成所に入所し、早い段階から漢学だけが学問の中心ではないことを悟っていたと考えられる。もちろん渡英後は、卓越した語学力と客観的な分析力で、日本と世界を比較し、日本の発展に必要なこととは何であるのかを考え続けていた。日本での活躍としては、初代文部大臣ということもあり、女子教育の必要性をはじめ日本の教育構築に尽力した。とても熱血家で、自ら一度決めたことは、誰から何と言われても最後まで貫く性格であったようである。

森自らの使用言語は、話す際は、薩摩言葉、東京言葉、英語。書く際には、漢文形式と英語であった

\* E-mail: kenmiwa2007@yahoo.co.jp

ようである。いずれの言葉も大変高い運用能力を持っていた。

## 2. 明治初期の日本語

酒井 (1996, p. 184) では、

一八世紀の日本列島では、漢文、和漢混交文、いわゆる擬古文、候文、歌文、そして、俗語文というように多数の異なった文体と書紀体系が用いられていた。これらの異なった雅俗混交的な文体は、地方別の俚言あるいはお国ことばとともに混在しており、それぞれを民族言語としてひとつの輪郭に収めることはできなかった。

と当時の日本の言語状況を述べている。また、井上ひさし作の戯曲『国語元年』という作品があるが、それは「全国統一話言葉の制定」を命じられた南郷清之輔とその家族の物語である。そこに登場する人々は実にさまざまな言葉を話し、一つの家庭の中でさえも、言葉が通じ合わない場面がユーモラスを交えていくつも描かれている。社会のさまざまな場面で、個人レベルでも国家レベルでも不都合を感じていたことが感じ取られる。その中で、とても印象的な場面がある。

ある日の晩、酒の席で、

修一郎 英語がナーモ。

清之介 英語？

修一郎 ヘイ、英語を全国統一話言葉になさったらでァモ。

清之介 それはイカンゾヨ、広沢。それは乱暴ヂャ。広沢、酔うチョルナ？

修一郎 チートは酔つとるケド正体はなくしとらんゼーモ。は、太吉さんの津軽訛りや弥平さんの遠野訛りより、英語の方がガイニやさしいとるとるでァーモ。津軽訛りが全国統一話言葉に

なったらしヤースガナモ。ドモナラン。それならいっそ英語の方がエーデアモ……。

清之介 わしの腹案には津軽訛りは入ッチョラン。

心配することはナイワヤー。

という掛け合いがある (井上, 2002, pp. 75-76)。さまざまなお国言葉が混在しているのが当たり前だった当時の人々にとっても、やはりコミュニケーションに不都合があったわけである。その中で、わが国として一つの統一した新しい言葉を作り出すことは想像しがたく、それぞれのお国ことばから、ある統一された言葉に切り替えることもまた難儀だと感じていることが伺える。それよりもいっそ英語を「全国統一話言葉」にしたほうがより簡単だと、一青年は感じているわけである。この一場面は本稿の中核である森有礼の唱えた「日本語廃止論・英語採用論」と共通する感覚だと言うことができるのではないだろうか。

話し言葉だけではなく、書き言葉においても同様の事態が起こっていた。教養のある人々は漢文を使って書き、さきほどの酒井 (1996) で示したように、さまざまな書き言葉が使われていた。その書き方、読み方を身につけていなければ、理解できなかったわけである。

以上のことから、当時の日本は生まれた場所、身分、教養によって、言語的格差が存在していたのである。

## 3. 森の日本語廃止論・英語採用論をめぐって

### 3. 1. 日本語廃止論・英語採用論について

森は駐米公使の時代に、日本の教育の在り方についてアメリカにおける15名の実業家や学者、宗教家といった有力者に文書で意見を聞き、後にその回

答集として *Education in Japan* を出版している<sup>1</sup>。これこそが、後世まで批判的とされる日本語廃止論・英語採用論の基である。

公的な立場としてアメリカに滞在していた森であったが、15名の有力者に日本の教育に関して意見を求めたことは、政府からの依頼によるものではなく、森個人の考えからであることは先行研究から明らかになっている。この15名のうち一人を除いて、全ての有力者から森の意見に反対とする回答であった。

長い間、森は後世の研究者の中で「日本人は日本語ではなく、英語を話すべきだ」という旨の主張をしてきたと解釈されてきたが、近年になって異なる解釈もされるようになってきた（福元，2015）。

また、小林（2005，p. 122）で、森が「簡易英語論」を発想するに当たる重要な資料について

今までの先行研究ではまったく取り上げることがなかったものであるが、森が「英語改良」の発想自体を得た時期とその情報源を突き止めるために非常に有力な証拠資料が存在する。それは森個人の蔵書の1つとして現存している *The Dean's English: a criticism on the Dean of Canterbury's Essays on the Queen's English* というタイトルの洋書である。この *The Dean's English* は、1864年に Dean of Canterbury であった Henry Alford（1810～71）が Victoria 朝時代の「純正英語（The Queen's English）」を援護するために書いた *A Plea for the Queen's English* という本に対し

て、英国文学協会の特別会員（Fellow of the Royal Society of Literature）であった米国人 George Washington Moon が Alford の議論を批判するために、同年に London において出版したものである（この年に初版から第3版までが刷られている）。森が購入していたのはその第4版（1865）のものであり、出版地は New York となっている。この Moon と Alford との「国語」論争は当時マスコミでも大きく取り上げられ、その関心は同じ英語国である米国まで飛び火することとなった。

と明らかにしている。森は、英語における国語問題の論争を歴史の事実としてだけでなく、肌で感じ学んだのである。この事実は、森の「日本語廃止論・英語採用論」を考察していく上で大変重要な資料である。

この節では、これまでも多くの研究者が論じてきた森と言語学者ホイットニーとの手紙のやり取りの中から、森の日本語観を考察したい。

### 3. 2. 森の日本語観——森とホイットニーのやり取りから

#### 3. 2. 1. 森からホイットニーへあてた手紙

本節では、ホイットニーにあてた手紙の前半部分の森が日本語について述べている部分を抜粋し考察を試みる<sup>2</sup>。

また、対象とする書簡は英文であり、考察にあたり客観的な英文解釈を必要とするため、本稿では、長谷川（2007，pp. 227-233）の訳文を引用する。

（抜粋 1）

The spoken language of Japan being inadequate to the growing necessities of the people of that Empire, and too poor to be made, by a phonetic

<sup>1</sup> New York の D. Appleton & Company で出版された。本稿では『森有禮全集』の第3巻（大久保，1972）に掲載されているものを引用。「副題に“A Series of Letters—Addressed by Prominent Americans to Arinori Mori”とあるように、森が駐米大使として、将来日本の教育のあり方について米国各界の有力者15名に対して意見を聞き、それぞれの回答の手紙や論文を集め、その Introduction（緒論）として、自筆の日本略史を加えて出版したものである。」（大久保，1972，p. 15）

<sup>2</sup> 本稿は『森有禮全集』（大久保，1972）を引用する。引用の際、考察のため筆者により分割して掲載する。

alphabet, sufficiently useful as a written language, the idea prevails among us that, if we would keep pace with the age, we must adopt a copious and expanding European language. (第1巻, p. 3)

日本の話し言葉は、日本帝国の増大する様々な必要にとって不十分なものであり、音標文字によって、書き言葉として十分に用いるにはあまりにも貧困なものであり、私たちの間には、時勢について行こうとするならば、語彙が豊富で発展力のあるヨーロッパの言語を採用しなければならないという考えが広まっています。(p. 228)

このように森が述べる背景には、先ほど 2. で述べたように当時の日本語の言語状況を忘れてはならない。森が書き言葉にするには未熟な言語なのだと思える位置づけることも当然のことかと思う。また小林(2005, p. 109)は、森が「社会進化論」信奉者で社会は進化せねばならない。さもなければ「自然の法則 (the law of the jungle = the survival of the fittest)」により、「退化」し「絶滅」してしまうという「社会進化」思想を英国経由で、19世紀後半に始まった日本の「国語ナショナリズム」に持ち込んだと述べ、

実際に森は Whitney へ助言を求めた「簡易英語採用論」の中でこの「商業競争」と「進化論」のロジックをそのまま「言語」問題にリンクさせている

と述べている。以上のことから筆者は、アメリカに駐在し、世界情勢を目の当たりにしている森には、すぐさま世界を動かし社会進化を進めている欧米のいずれかの言語を日本に採用すべきだと考えるのも自然なことかと思う。そして採用するという事が、日本語を廃止する事とはこの時点では読み取る

ことができない。

また、“we must adopt a copious and expanding European language.”と述べていることにも注目すべきである。“adopt”の中心的な語彙の意味は、物事を選んで受け入れるという意味であるが、「～を養子にする」や「ある考えや方法を採用する」という表現の際に使われる(野村, 花本, 林, 2015)。この意味からさきほどの森の英文を解釈すると、以下の2通りの解釈が考えられるのではないだろうか。

- ① 日本語を完全に廃止して国語をヨーロッパの言語に変える。
- ② 日本語に加えて貿易や外交のためヨーロッパの言語を取り入れる。

筆者には、森は②を考えていたのではないかと考える。それは国民レベルに課されたものではなく、まず必要になる分野で早急に対応すべきだという考えが含まれていたのではないかと考察する。もちろんその必要性は国民に知らせるべきだと感じていたことは言うまでもない。その根拠として、さきほどから触れているように、森は英国留学中に英国における国語論争を目の当たりに学んだ。小林(2005, p. 106)によれば、「森が個人的に所蔵していた Moon の *The Dean's English* (第四版)」の、

The care of the national language I consider at all times a sacred trust, and a most important privilege of the higher orders of society. Every man of education should make it the object of his unceasing concern to preserve his language pure and entire, and to speak it, so far as is in his power, in all its beauty and perfection.

という部分に触れ、

これは「国民教育を真剣に考えるものは、常に『民族の言語』を『純化』され『完備』されたものとし、できる限りにおいてその『存在』に努めることが大きな責務である」とい

う内容になっている。森はこの文章を確実に読んでおり、同様の言語思想をもって「日本の教育」改革の中心に捉えられていた言語改革に臨もうとしていた可能性が極めて高いことをしっかりと理解しておくことが重要である。

と述べている。この思想を踏まえて“we must adopt a copious and expanding European language.”について、①日本語を完全に廃止して国語をヨーロッパ語に変えるという意味で述べたとは考えられない。

以上のことから、この部分において、筆者は、森は日本で使う言葉を日本語から英語に変えるべきだとは主張していないと考える。

(抜粋 2)

The necessity for this arises mainly out of the fact that Japan is a commercial nation; and also that, if we do not adopt a language like that of the English, which is quite predominant in Asia, as well as elsewhere in the commercial world, the progress of Japanese civilization is evidently impossible. Indeed a new language is demanded by the whole Empire. It having been found that the Japanese language is insufficient even for the wants of the Japanese themselves, the demand for the new language is irresistably imperative, in view of our rapidly increasing intercourse with the world at large. (第1巻, p. 7)

その必要性は、主として、日本が商業国家であるという事実から生じており、商業の世界において、他の場所と同様、アジアにおいても非常に広く行きわたっている英語のような言語を採用しなければ、日本の文明の進歩は明らかに不可能です。本当に、帝国全体にとって、新しい言語が必要となっているので

す。日本人自身の様々な必要にとってさえも、日本の言語は不十分であり、私たちが急速に広く世界との交際を増大しているという点からも、新しい言語に対する需要はいやおうなく緊急のものであるということが認識されてきました。(p. 228)

この部分に関して、筆者は、森は日本が貿易に頼る国であることを踏まえて、世界の多くの国で使用され広く認知されている英語のような言語を急いで採用（教育を開始する）しなければならないと考えているのではないかと考える。

また、日本語が取るに足らない言語だとも解釈されかねない

It having been found that the Japanese language is insufficient even for the wants of the Japanese themselves,

という部分に関して、森は、先にも述べた通り当時の言語状況を言っているのもであって、決して日本で話す言葉を英語にするべきだと考えているとは筆者には判断できない。これは、イ (2012) の

森有礼は、「商業民族」である日本が「急速に拡大しつつある全世界との交流」をすすめるためには、英語を採用することが不可欠であるという。けれども、森有礼は、けっして日本語の使用をやめるべきだなどとは一言も述べていない。(p. 6)

に一致する。

(抜粋 3)

All the schools the Empire has had, for many centuries, have been Chinese; and, strange to state, we have had no schools nor books, in our own language for educational purposes. These Chinese schools, being now regarded not only as useless, but as a great drawback to our

progress, ore in the steady progress of extinction. Schools for the Japanese language are found to be greatly needed, and yet there are neither teachers nor books for them. The only course to be taken, to secure the desired end, is to start anew, by first turning the spoken language into a properly written form, based on a pure phonetic principle. It is contemplated that Roman letters should be adopted. Under such circumstances, it is very important that the alphabets of the two languages under consideration - Japanese and English - be as nearly alike as possible, in sound and powers of the letters. It may be well to add, in this connection, that the written language now in use in Japan, has little or no relation to the written language, but is mainly hieroglyphic — a deranged Chinese, blended in Japanese, all the letters of which are themselves of Chinese origin. (第1巻, p.3)

何世紀にもわたって、日本帝国のあらゆる学校では漢字が教えられてきました。そして、奇妙なことに、教育上の目的のために、私たち自身の言語を教える学校も私たち自身の言語でかかれた書物もずっとなかったのです。これらの漢学を教える学校は、今日では単に必要がないだけでなく私たちの進歩にとって障害であると考えられており、着実に消滅の道をたどっています。日本の言語のための学校が大いに必要だと気づかれています。そのための先生も書物もまだありません。望ましい結果を確保するための唯一の方法は、まず第一に、純粹に音声に基づいた原則によって、話し言葉を適切な形態の書き言葉に変えていくことから始めることです。ローマ字を採用することが試みられています。そのよう

な条件のもとでは、考察中の二つの言語——英語と日本の言語——の字母が、音声と文字の力においてできるだけ似ていることが非常に重要です。この文脈においては、日本で現在用いられている書き言葉は、話し言葉とほとんど、あるいは、全く関係ないものであり、主として象形文字 - 日本の文字に乱れた漢字が混ざったものであり、その文字のすべてが中国に起源をもっています。(p. 228)

この部分では森は、「日本語を教える学校がない」という趣旨を訴えている。筆者はこれを重要な記載だと考える。なぜなら、当時の人にとって日本語という概念がいかに薄かったかという証拠である。さきほどの酒井(1996)からも理解できるように、江戸時代の学校(寺子屋)では中国の言葉(漢学)が教えられていた。しかし、話されていることは中国の言葉とは異質であった。また、同じ日本人であっても、身分や教養によって話す言葉はさまざまだったのである。学校に通う機会のなかった者は、漢学の教養がないため読むことができない者もあったと予測できる。しかし、当時の日本は、それが当然のこととして存在していたのである。

さらに重要な点として、「純粹に音声に基づいた原則によって、話し言葉を適切な形態の書き言葉に変えていくことから始めることです。ローマ字を採用することが試みられています。」と述べていることが挙げられる。筆者は、森がこの考えに至ることができたのは、森自身が英語の言語世界と日本語の言語世界にしっかりと入り込んでいたからだと考えられる。この点に関しては長谷川(2007)からも、森がいかに言語習得者として優れていたのか知ること

ができる<sup>3</sup>。また、当時から英語の言語世界は、話し言葉と書き言葉が一致しており、おそらく人々も身分に関係なく同じように話していたはずである。この言語環境は、薩摩から江戸に渡り、そのたびに新しい言語環境に適応してきた森には衝撃的なカルチャーショックだったのではないだろうか。それは森だけではなく、当時藩や政府から海外に派遣された者すべてが感じたことではないかと思う。

この二つの点の重要性はイ（2012）でも述べられており<sup>4</sup>筆者と一致するものと考えられる。

以上、森の日本語廃止論にあたる部分について考察してきた。このあと手紙の話題は、英文法の簡易化について言及している。本節の考察で、長谷川（2007）やイ（2012）との一致点とともに、さらにその根拠となり得る糸口を見つけ出すことができた。

<sup>3</sup> 「福沢は英語の文献を読み、得た知識を日本語で紹介するが、英語の著作を残すことがなかった（英語で自己の見解を発信しなかった）し、馬場は英語を聞き話すことができ、日本語で巧みに演説をし、森を批判した *An Elementary Grammar of the Japanese Language*（『日本語文典』、一八七三）などの英語の文を残し、自伝や日記も英語で書いたが、ついに日本語で文書が書けなかった。当時の知識人の中でも森のように複数の言語を自由に使い分けて話し聞き読み書くことができた例は少ないと思われる。」（長谷川、2007、pp. 224-225）

※馬場 = 馬場辰猪

<sup>4</sup> 「たしかに森有礼は「日本帝国への英語の導入」をよく主張している。しかし、それは「日本語の廃止」とはまったくちがうレベルの問題である。なぜなら、そこではいわゆる「通商語」としての英語の必要性が説かれているだけだからである。他方で、森は、もっぱら漢文に基づいたこれまでの教育方法を改めねばならず、日本語による教育法の確立を求めており、そのための日本語のローマ字化さえ提言している。これはどうみても「日本語を廃止すべきだ」という主張ではない。」（イ、2012、p. 6）

### 3. 3. ホイットニーは日本語廃止・英語採用論だと解釈したのか

本節では、森からの手紙にホイットニーはどのように受け止めたのかということ考察したい。以下に、「英語を日本に採用すべきだ」とした森の主張に対する返答の部分抜粋する。

（抜粋 4）

In replying to your inquiries and suggestions, it seems desirable to discuss a little the inducements that should lead to such a change of language as you contemplate on the part of the Japanese people. The fact the inherent superiority of the English language to the Japanese or Chinese is not, of course, the only one to be considered. Were the Japanese merely seeking a best language to put in place of their own, they would want to look carefully through the world, ancient as well as modern, and choose, after a mature weighting of the merits of many dialects. The history of languages, also, shows this consideration to be of minor consequence. There have been many instances in the world of a people's abandoning its ancestral speech and adopting another; but, so far as I know, it has always been under the influence of the superiority in culture of the speakers of the other language — usually, indeed, aided also by political supremacy or social preponderance. The people in question has, as it were, by adoption of another language, joined itself on to another community, linking its cultural progress with that of the latter. So, I imagine, it would be with the Japanese: so far as they learned and used English, it would be because, mainly, of the eminence of the English-

speaking races, in the present political and social history of the world, and in the career of modern civilization in literature, science, and art. By coming to speak English, they would, in a manner, make themselves a part of those races, having immediate access to all that was done by them; uniting, go so far as civilization was concerned, the destinies of the two peoples. All this seems to me so much the more important advantage to be gained by the adoption of English in Japan, that I should be very loath to see any thing done which would interfere with its realization. (第3巻, pp. 145-146)

貴兄の研究と提案に答えるにあたって、貴兄が日本の人々に対して企てようとしているような言語の変更を導く動機について少し論じておくのが望ましいと思われまふ。日本の言語や中国の言語に対する英語固有の優越性という事実は、もちろん、考慮されるべき唯一の事実はありません。日本人がただ単に自分自身の言語の代わりに最善の言語を求めただけならば、彼らは古今東西のことばを注意深く探し、多くの地方、地域のことばの長所をじっくりと慎重に考慮した後に選択したいと考えるでしょう。しかし、また、諸言語の歴史は、このような考慮が大きな結果をもたらさないことを示しています。人々が古くからの話し言葉 (speech) を廃止して他のことばを採用した例はこれまで世界にいくつもありません。しかし、私の知る限りでは、それは常に他の言語の話し手がかつ文化の優越性の影響下にある場合であり——実際は、通常、政治的支配あるいは社会的優越の下にある場合でした。これらの人々は、自分たちより優位な他者の言語の採用によって、その他

者の共同体と一緒にになり、自己の文化的進歩をその他者の文化的進歩と結びつけてきました。ゆえに、日本人の場合もそうなると思ひます。そうなるのは、日本人が英語を学び用いる限り、主として、現在の世界の政治的、社会的な歴史において、また、文学や化学や芸術の点で近代文明に果たしている役割において、英語を話す諸民族が示している卓越性によるものです。英語を話すようになることによって、日本人は、ある意味で、これらの諸民族の一部となり、それらの諸民族がなしてきたすべてのことに直接に接するようになるのです。文明に関して、両者の運命は結び付けられるのです。これらのことはすべて、日本における英語の採用によって得られる、より重要な利点であり、その実現が妨げとなることを私は望みません。(pp. 232-233)

この部分でホイットニーは、森が日本の言葉を完全に英語に変えようとしていると解釈していることが読み取れるのではないだろうか。つまり先の 3. 2. 1. に挙げた①日本語を完全に廃止して国語をヨーロッパの言語に変えるという立場だと解釈したのである。ホイットニーは、一国の言葉を別の言葉にすっかり変えてしまうという行為は、当時の欧米列強の支配下にある植民地のすることだと思っている。そういった支配下でない、日本がなぜそのようにするのか理解できないといった心境ではなかっただろうか。このように解釈される要素は、森の書いた英文表現のさまざまな点に要因があるのだろう。その考察はこれからの研究課題としたい。筆者がここで最も重要だと考えることは、英語母語話者によってもそれが「日本語廃止論」だと解釈されていることである。

そして、このような心境に陥るもう一つの要因と

してホイットニーが米国人であることにあるのかもしれない。さきほども少し触れたが 19 世紀後半、英国では「国語ナショナリズム」運動が起きている。小林（2005）によれば、「日本の『国学』を 17 世紀末から 19 世紀中期までの時代概念とするならば、イギリスの『国学』は 16 世紀中葉から（中略）19 世紀にまで及んでいた」として、英国ではこの間に、「英国の『国語ナショナリズム』の最大の特徴は『言語の歴史』の中で『一つの民族』と『一つの言語』の『連続性』を発見することであった。」（pp. 33-34）というように英国には、「社会進化」の一過程で国内における言語運動が起きていたのである。米国人のホイットニーには経験や発想がなかったのかもしれない。

どのような要因であったとしても、ホイットニーによるこの意見は後の森有礼史や国語学の研究者たちにとって要となったことは事実である。

#### 4. おわりに

本稿では、森とホイットニーとの間で交わされた手紙の一部分を考察してきた。その中で筆者が最も注目したことの一つは、“adopt”という単語である。辞書内での意味としては 2 通りの意味解釈が考えられたが、英語の母語話者であるホイットニーには「日本の言葉を英語にする」と読みとられた。これこそが森が「日本語廃止論・英語採用論」を唱えたと位置づけられた原点だと考える。ホイットニーは、なぜ植民地でもない日本が英語を採用する必要があるのかと、それは国民のアイデンティティそのものが変わることにすると森を論じた。しかし、そもそも国語としての日本語はまだなかったのである。英語のように、国民全員が理解できる言葉はまだなかったのである。その点についてホイットニーは把握していなかったのではないかと考える。このことは、後に森を批判する日本人の学者たちにも通

じる。イ（2012）が述べているように同時代に生きた馬場辰猪を例外として「すべて『日本語』が『日本の国語』として身をさだめたあとの観点でなされている」（p. 12）のである。森と同時代に生きた人々が感じたさまざまな形が存在する日本の言葉、お国が違えば通じにくい日本の言葉の視点に立っての研究ではなかったのである。

森がホイットニーから回答を受け取ってから書簡として出版するまで 1 年弱の時間がある。その間に、どのようなことを考えたのだろうか。書簡を世に出して以降、一切「国語を英語に」とは言わなかった。しだいに政府の大仕事として「原文一致」が唄われるようになり、上田万年らを中心とした学者や有識者によって現代の日本語の輪郭が作られていく。その過程も森は文部大臣として活躍していた。いったい何を思ったのであろうか。

その後の日本社会は今日まで、志賀直哉（1946/1974）によって「公用語をフランス語化論」が提唱されたり、ときの内閣によって「英語第二公用語論」が提唱されたりと、常に外国語の採用を辞めようとししない。特に英語の習得に関しては生涯を通じて重要視されている。これは森が異国に身をおき、英語の重要性を強く訴えたことと同じことではないか。この背景には、日本が先進国として世界からある一定の認知を得た現在でも、世界がますますグローバル化していく中で、その中心に日本も入り、維持しようとするならば、「日本語を使っているはいけない。日本語では恥ずかしい。」と日本人の誰もがどこかに持っている意識なのかもしれない。また、最近では自治体や日本語教育の世界でも、日本に定住している外国人に対して震災時に使う「やさしい日本語」、外国人が学習する際の便宜のための「簡易日本語」の取り組みがなされている。ここにも、どこか外国人に日本語を覚えてもらうなんて申し訳ないという日本人が日本語に対するコンプレックス意識、あるいはイ（2013, p. 271）で述べられ

ているように、「子ども向けの日本語」という意味の「やさしい日本語」, 安田 (2013, p. 338) で述べられているように「上から目線」の「やさしい日本語」というように、日本語は日本人にしか通用しないという意識があるのではないか。「日本語はとりわけ英語には到底及ばない言語」であり「日本語は外国人には習得が難しい言語」, この二つの相反する意識が少なくとも森の時代から、ずっと日本人の意識にあるのではないか。日本語教育に携わる筆者には、どの意識も理解ができ、自分自身にもその意識が根付いているのではないかと自覚する。しかし、災害時の「やさしい日本語」を除いて、その他は、乱暴な解釈ではあるかもしれないが「やさしい日本語」を利用せずとも翻訳・通訳で賄うことができ、そのほうが正確に伝わるのではないかと考えている。そして、日本語学習においても「やさしい日本語」に頼らず、諦めずに学習に取り組み、同時に生きた日本語の世界に浸っていくことで、いつかその学習者が文字通りの日本語の奥深さや言葉と共にある日本文化、日本人の気質が一つにつながっていくと信じている。これはどの言語にも当てはまることで、かつての森が英国に学んだように言語はその民族の文化である。そのことから日本人は誇りをもって日本語を使うべきであり、日本語に対して誇りや自信を持てるような教育が必要なのかもしれない。そうすることで、長年根付いている英語に対する崇拜意識やコンプレックスから一言語への「敬意」に変わっていき、その意識改革の中で、定住する外国人に対しても「上から目線」の「やさしい日本語」意識が消えていくのではないだろうか。その一方で、近年ではEPAによる外国人看護師・介護福祉士候補者の受け入れもあり、従来の日本語教育が担ってきたことよりもより専門性の高い、ミスコミュニケーションが許されない環境下での日本語教育が求められている。その中で「やさしい日本語」が果たす役割は大きく、現場では大いに求められて

いることなのかもしれない。言語について考え、教える立場として今後も以上のことについて考えていきたい。

本稿は、森とホイットニーの意見交換のごく一部分について考察した。実はこの意見交換では「英語簡易論」についてもっと深く述べられている。今後の課題として、他の学者や有識者とのやりとりも含めて *Education in Japan* を中心とした森の言語教育観についてより深く、客観的に考察していきたい。

#### 文献

- イ・ヨンスク (2012). 『「国語」という思想』岩波現代文庫.
- イ・ヨンスク (2013). 日本語教育が「外国人対策」の枠組みを脱するために——「外国人」が能動的に生きるための日本語教育. 庵功雄, イ・ヨンスク, 森篤嗣 (編) 『「やさしい日本語」は何を目指すか——多文化共生社会を実現するために』 (pp. 259-278) ココ出版.
- 井上ひさし (2002) 『国語元年』中公文庫.
- 大久保利謙 (編) (1972). 『森有禮全集 (第1, 3巻)』宣文堂書店.
- 小林敏宏 (2005). 森有禮の「簡易英語採用論」言説 (1872-73) に与えた 1860 年代英国における「国語 (英語)」論争の影響について『成城文藝』189, 124-68.
- 酒井直樹 (1996). 『死産される日本語・日本人「日本」の歴史——治政的配置』新曜社.
- 志賀直哉 (1974). 国語問題『志賀直哉全集 第七巻』 (pp. 339-343) 岩波書店. (原典, 1946)
- 長谷川精一 (2007). 『森有禮における国民的主体の創出』思文閣出版.
- 野村恵造, 花本金吾, 林龍次郎 (編) (2015). adopt 『オーレックス英和辞書 (第2版)』旺文社.
- 福元美和子 (2015). 森有禮の日本語廃止論・英語採用論をめぐって——先行研究を中心に [研究

ノート]『総合社会科学研究』3(7), 73-82.

安田敏朗 (2013). やさしい日本語の批判的検討.

庵功雄, イ・ヨンスク, 森篤嗣 (編)『「やさしい日本語」は何を目指すか——多文化共生社会を実現するために』(pp. 321-341) ココ出版.

Forum

One consideration for the Japanese language during the early stage  
of the Meiji era: Arinori Mori's arguments for the abolition  
of Japanese and the adoption of English

FUKUMOTO, Miwako \*

*Nagasaki Junior College, Japan*

Abstract

This paper explores whether Arinori Mori (1847-1889) really proposed a “Japanese abolitionism, English adoption” theory, with a focus on Mori's correspondence with the American linguist William Dwight Whitney (1827-1894), which has often been cited and criticized as the origin of Mori's argument.

Copyright © 2016 by Association for Language and Cultural Education

*Keywords:* Japanese; the adaption of English; Arinori Mori; the abolition of Japanese

---

\* *E-Mail:* kenmiwa2007@yahoo.co.jp